



此殿名

114  
A 670



一八八六年第十月二十五日決定セシ天津  
 條約工追加スル新條約  
 ○佛蘭和皇帝陛下ト支那皇帝陛下相共ニ兩帝  
 國間ニ起リシ不和ヲ鮮キテ悔悟スヘキ事件ノ  
 為メニ兩國間ニ中絶セシ昔日和親ノ交際ヲ挽  
 回シテ永世之ヲ保タシ為メ特ニ雙方ヨリ和議  
 談判ノ全權公使ヲ任セリ茲ニ其姓名此兩公使ハ  
 互ニ其國法ニ適ナル全權ノ委任状ヲ交換セ  
 シ後次ニ掲クル條件ヲ結約セリ

大正十一年四月  
大隈侯爵郵寄贈

12 /



第一條 ○去歲六月英佛二國ノ全權公使共ニ北  
京ニ赴キ天津ノ本條約ヲ交換セシメ天津河  
口ニ到リシ時支那ノ武官等此所ニ於テ兩公使  
ニ對シテ無禮ノ舉動ヲ為セシヲ支那皇帝陛下  
ニ於テ大ニ之ヲ憂慮シタリ  
第二條 ○佛蘭西皇帝陛下ノ特命全權大使天津  
ノ本條約ヲ交換セシメ北京工派出スレバ本  
使該京駐劄中ハ其位階ニ準シテ接遇スヘシ且  
本使奉命ノ大任ヲ障礙ナク完行セシムベク  
支那官人ニ於テ注意妥辦スヘキ

に 2

第三條 ○一千八百五十八年第六月二十七日天  
津於テ鈐印セシ條約ハ新條約ニ於テ更ニ改  
正セシ條款ヲ除クノ外前條既ニ講スル本條約  
交換ノ後ハ直チニ其條件ヲ悉ク正實ニ踐行ス  
ヘキ  
第四條 ○支那皇帝陛下ヨリ佛蘭西政府ニ償金  
貳百萬テイルス支那貨幣ノ名ヲ拂フヘキヲ約セシ  
天津條約ノ第四條ヲ廢シテ更ニ此償金ヲ八百  
萬テイルニ増加スル新條約ニ代ヘタリ  
天津ノ條約面ニテ決定スル貳百萬テイルスノ

額内ノ<sup>舊</sup>款ノ稅關ヨリ現金ヲ以テ既ニ償ナ  
フ金額ハ此條款ニ講スル八百萬テイルスノ内  
ヲ預シメ支消セシモノト看做スヘキヲ結約  
セリ

貳百萬テイルスヲ支消スル方法ヲ記載セシ天  
津條約<sup>●</sup>第四條中ノ文面ヲ廢シタリ<sup>」</sup>因テ新條  
約ニ議定セシ八百萬テイルスノ内支那政府ニ  
テ連債ノ金額ハ外國通商ノ地タル各港稅關ノ  
歳ニ就キ正金額ノ五分一ヲ其負債ニ照料シ  
テ三個月毎ニ拂フヘキ<sup>」</sup>但初拂ノ期限、必年

十月一日<sup>」</sup>起リ

12  
3

十二月三十一日ニ於ル<sup>」</sup>佛蘭西ニ償金ハシ  
テ一段準備セシ此金額ハ墨斯格銀或ハ支那通  
用ノ貨幣以テ佛蘭西公使又ハ其代理人ノ手ニ  
納ムヘキ<sup>」</sup>但五拾萬テイルスノ額ハ豫シメ來  
ル十一月二十日ヲ期シ一度ニ之ヲ拂フカ或ハ  
支那政府ノ融通ニ因テハ期ニ先ンシ天津ノ地  
ニ於テ拂フヘキ<sup>」</sup>佛蘭西公使ト支那官人ニ於  
テ命スル所、混交ノ委員ハ償金金額ノ拂方ヲ  
實際ニ施シ其總計ヲ検査シ其領證ヲ交付シ並  
ニ此ノ如キ計場合ニ於テ要スル法式ヲ悉ク

完全スル為メ其手續ノ規則ヲ定ムベキ

第五條〇八百萬ヲイルスノ金額ハ佛ニ於テ支

那征討ノ兵費並ニカ廣ク燒ノ時掠奪ニ逢

ヒシ佛蘭西人及ヒ佛人ノ保護ヲ受クル者ノ被

リシ損耗並ニ身躰所有物等ノ損害ヲ償ナフ為

メニ佛蘭西政府工供給スヘキモノナリ佛蘭西

政府ニ於テハ此金額ヲ以テ此事ニ關係シテ該

政府ニ對シ此金ノ配當ヲ受クヘキ權利ヲ有ス

ル者ニ其權利ノ多寡ニ準シ衡平ニ分與スベシ

而シテ條約ヲ取締ル委員ノ間ニ壹ニテ

124

ハ佛國臣民ト其保護ヲ受ル者ノ私リ

ト其身躰ノ損害ヲ償フモノト定メ残り七萬ニ

イルスハ戰爭ヨリ生セシ費用ニ照料スヘキ

ヲ結約セリ

第六條〇一千八百四十六年支那皇帝ヨリ出ス

ル詔勅ノ意ニ照準シテ嚴密ナル法教查察所

ヲ立テ時時其レカ為メ没収セラレシ耶蘇宗徒

ノ寺院及ヒ慈悲ノ為メニ設ケシ建物ハ支那政

府ヨリ其墓地ト其附屬ノ建物ヲ合セテ之ヲ佛

蘭西公使工引渡スベシ公使之カ紹介トナリテ

蕃地事務局

各其所有人ニ戻スヘキ

第七條 ○天津府及ヒ其港ハ  
既ニ外國通商ノ地トシテ開キタルトコロノ諸  
府諸港ト同様ノ條約ニテ開港スヘキ  
而モ其  
事ハ兩國人民ニ於テ遵守スヘキ新條約鈐印ノ  
日ヨリ施行スヘキ  
但此條件ハ天津ノ條約面  
ニ每款記載セシ者ト同様ノ権力アルヘキ者ニ  
シテ別段其本條約ヲ交換スルニ及ハサル  
第八條 ○天津工占據スル佛兵ハ新條約面ノ  
四條ニ講スル五拾萬テイルスヲ消却ノ

地ヲ引揚ケ  
天津ノ地ヲ引揚ケル  
天津ノ地ヲ引揚ケル  
天津ノ地ヲ引揚ケル

テ駐營スルヲ得ヘシ其後右兵隊ハ支那帝國  
他ノ海邊ニ占據スル所ノ佛兵ノ引拂ニ就テ要  
スル所ト同様ノ條約ニテ引揚ケベキ  
但佛兵  
ノ總督タルモノ便宜事ニ從ヒ其指揮スル所ノ  
各軍隊ヲ三冬ノ間天津ニ駐營セシムルノ權ア  
ルヘシ就中各軍ノ總督タルモノ支那政府償金  
ヲ全ク消却ヒサル前ニ天津ノ地ヲ引揚クル  
ヲ不都合ト思フキハ其期ニ至ル迄兵隊ヲ該地  
ニ左置クヲ得ヘキ

第九條 ○ 條

取締ヲ重立タル委員候議ノ上

天津ノ本條ヨ

核セシ以後支那皇帝勅詔ヲ本

國各省ノ地方長官工下シテ海外各國工移住又

ハ家産ヲ富殖セシ為メ海外工航セント欲スル

支那人ヲ束縛セス戸主及眷族ニ至ルマテ外國

通商ノ為メ開キタル各港碇泊ノ佛艦工乗組

ヲ允許スル旨ヲ布令スヘキヲ結約セリ又此

移住人ノ利益ニ於テ職業ノ自由ヲ保證シ及ヒ

其權利ヲ保護スヘキ為其掛ノ支那官吏ト該地

駐劄ノ佛國公使ト候議シテ常ニ各口ノ意ニ

ル

任<sup>シ</sup>移住<sup>ニ</sup>約束ニ必要ナル身軀健康ト行<sup>ハ</sup>ト

ノ亦合<sup>ク</sup>保証スヘキ規則ヲ施設スル<sup>ヲ</sup>結約

セリ

第十條 ○ 條約ヲ取締フ重立タル委員合議セル

天津ノ條約ニ誤リテ百五拾頭以上ト記セシ船

船ハ一頭ニ付五マツス<sup>一マツスハ我十一ト定</sup>

メシ頭數割合稅ハ千八百五拾八年英亜兩國間

ニ鈐印セ<sup>ル</sup>條約面ニモ四マツスニ越エサルヲ

以テ更ニ四マツスニ省減スル<sup>ヲ</sup>一定セリ且

茲ニ最モ特權ヲ得タル國民ノ取扱ヲ要求スル

權ヲ佛蘭西ニ附テスル天津條約ノ第貳拾五條  
ノ未章ヲ敢テ引證スルヲ用ヒス  
現今ノ和陸條約ハ北京ニ於テ四通ノ條約書ヲ  
草シ千八百六拾年第十月二十五日ニ成就シテ  
雙方ノ全權公使各茲ニ鈐印セリ

バロンゴロ候

クロス候印

恭親王  
コンク公印

茲ニ二個條ヲ入ル

我外國事務省宰相兼總裁此布告ヲ實際ニ施行

12  
7

スヘキ命ヲ奉セリ

普也官務局

A rectangular grid with a blue border, containing ten vertical columns for writing.



香地事牙后

4